

書評

習近平が統括する現代中国は、なぜ強権的な独裁国家になったのか。それは、習近平が強烈に意識し、模倣してきた建国の父・毛沢東自身の躰きに由来する。毛沢東にとって共産主義は、究極の「選択」だった。毛沢東が書いた手紙、新聞記事、論考、旧ソ連の史料等をもとに描く。

〈毛沢東は、たとえ救国〉のためであったとしても、民主主義の理想をかなぐり捨てて暴力革命を選んだ。そのツケを、中国は今日まで払い続けている。全6章からなる。序章 革命と独裁で

独裁国家になった遠因を炙り出す

「毛沢東 革命と独裁の原点」

興梠一郎 著

方、軍閥・張敬堯を湖南から追放する秘密結社計画に着手した。

第3章 湖南自治運動と挫折で〈自治運動の挫折で、残された道は「革命」しかないように見えた。当時の急進化した若者と同様、ロシア革命方式を受け入れた動機は、極めて現実的だった。マルクス主義の思想に共鳴して革命を選んだのではなかった〉。

第4章 ソ連の影で〈毛沢東は、コミンテルンが党中央を通して課したノルマを着実にこなした業績が陳独秀の目に留まり、党中央指導部に大抜擢される〉。

終章 毛沢東と陳独秀 ―二つの道で〈毛沢東は最高指導者の地位に上り詰め、陳独秀は共産党トップから追い落とされ除名処分を食らう。二人の命運を分けたのはモスクワのスターリンだった。こう結ぶ。〈陳独秀は「スターリンを生み出した『独裁制』を諸悪の根源とみなした。たとえスターリンが倒れても、無数のスターリンがソ連や他国から生まれると予言していたが、それは的中した。独裁を生む制度を変えなければ、これからも「無数の毛沢東」が生まれ続けるだろう〉。

〈鄧小平は、国家主席に任期制を設け、後継者を事前に決めておくよう手配したが、二つとも消えた。習近平は「一人独裁体制に変えた。毛沢東時代に先祖帰りした〉。

第1章 原点で〈高等学校を退学した毛沢東は図書館に通い、アダム・スミス、モンテスキュー、「進化論」などの西洋の社会科学の著作に触れた〉。

第2章 湘南第一師範で〈毛沢東はジャーナリストとして活躍する一

著者は、1959年、大分県生まれ。神田外語大学教授。九州大学経済学部卒業。東京外国語大学大学院修士課程修了。外務省専門調査員、同省国際情報局分析第2課専門分析員などを歴任。共産主義の原点を説き明かし、現代中国が類を見ない独裁国家になった遠因を、もの見事に炙り出した。

(狸)



中央公論新社
3300 円 (税込)

※無断での複製・転載を禁じます